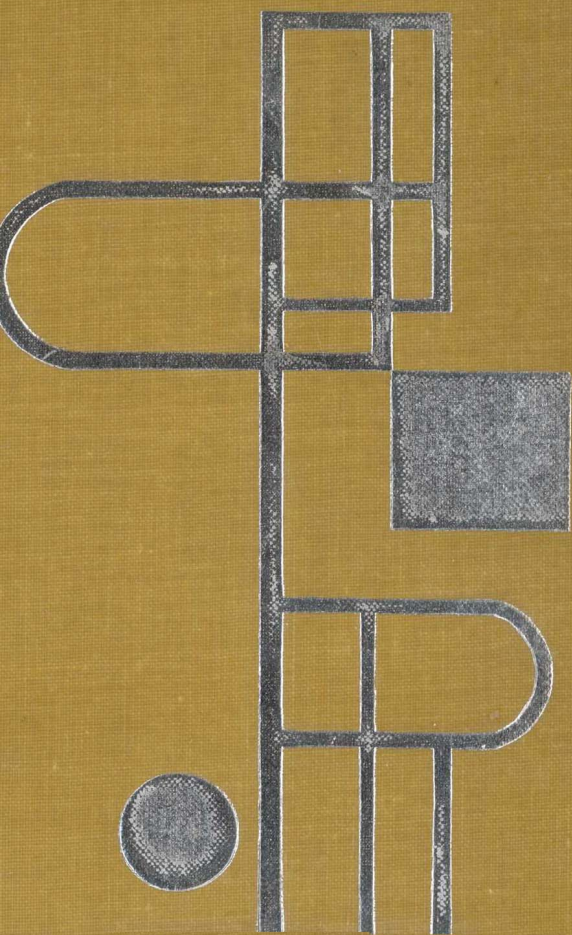


明治小説集



現代日本文學全集
84



明治小説集

定本限定版

現代日本文學全集

84



筑摩書房版

明治小説集

昭和四十二年十一月二十日 發行

代表者

長田幹彦
なが た みき ひこ

發行者

東京都千代田區神田小川町二ノ八
竹之内靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

電話 東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四一三三
印刷 多田印刷株式會社
製本 山見製本株式會社

明治小説集 目次

饗庭篁村

當世商人氣質……………五

三宅花圃

藪の鷺……………三

矢崎嵯峨の舎

初戀……………五

木村曙

婦女の鑑……………六

巖谷小波

妹脊貝……………一〇五

宮崎湖處子

歸省……………二三

後藤宙外

ありのすさび……………一〇六

江見水蔭

炭焼の煙……………一〇七

北田薄氷

乳母……………一〇八

柳川春葉

泊客……………一〇九

田口掬汀

機動演習……………一一七

三島霜川

解剖室……………一二三

中村星湖

少年行……………三三

白柳秀湖

驛夫日記……………六二

生田葵山

都會……………三三

水野葉舟

微溫……………三七

青木健作

虻……………三六

長田幹彦

霽……………三九

平出修

計畫……………三六

逆徒……………三六

解說……………四二

年譜……………四九

裝幀 恩地孝四郎

明治小說集



當世商人氣質

一の巻

第一

我子に鹽を踏み固めた身代の講釋
無理は内義が疊たゝいての歎きも
餘所に吹く風身にしみる親の慈悲

商人に系圖なし、金を以て氏筋目とす、抑も是は桓武天皇九代の後胤平の知盛の末孫なり、と名乗つて白柄の長刀水車の如くに廻しても、盆と暮との二季の戦場に槍くりといふ打物を敵に取られては、幽靈の縁をひいてドロンと消えるより詮方なく、先祖は龍宮へ渡つた藤太秀郷でござる肩胛をいからした處が、俵の底を叩いても米一粒なき仕合せでは、三上山を七巻半

饗庭篁村

も巻くほどな酒屋魚屋の書出しを見て、百足に草鞋足早に飄落するより外に策なし、正一位に陞つた家の落胤と誇つても、埃に埋む四辻に稻荷壽しの店を出しては、身代の尾が見えて貴からず、たとへ昔しは街頭にたゞすみし雲介なりとも、儲け出して富豪の身となれば、肩に残つた荷物瘤までが福相のうちに稱さるゝものぞかし、左れば商人の目ざす的黑星は金といふ字に止めたり、稼ぎの上には何を仕ようか恥にあらず、と眞黒になつて木挽町に炭團屋をして、夫婦共稼ぎの山形屋萬助といふ者がわづか二十年経つか經ぬに、八丁堀邊へ立派な質店を出し角から折り廻して地面三ヶ所、土藏の地形も千萬年を期して、堅牢地神の頭まで届くほど深く石を築き込み、動きなき身代と人にも稱せられて、御蔭を蒙ぶらぬ者までが旦那々と崇めるを、見やう見真似に横町の洋大までが尾を揺つて愛想するは、皆も金の威徳の有難や、是につけても龜末にすべきに非ず、身代が太るほど活計向きを細くするは、節儉の垣根を超えて客齋の圍ひ内へ入りたりと人の陰言よくは云ひたがらぬ世の癖、と聞ても知らぬ顔で通しけり、

獨り子の千太郎と云は、父にも母にも似ぬ色白の優形にて、生れつき情深く乳母下女はじめ召仕ひに憐れみを加へければ、出入る者も有難がり、梅檀は二葉お十一にして此のお心持未は嘸と年の上にまで、おの字を付けて尊敬すれば、親の心はいかばかり嬉しからん、片輪なるさへ褒めらるれば悪き心はせぬものなれば、と萬助の氣を推し量つて傍の者が云ふとは大きな違ひ、萬助は我子が年にませて慈悲深き行爲を見て密かに眉をひそめ、折角是まで稼ぎ出した身上も彼の心入では能く持堪へはせまい、皆も苦しい事ぞと呟やきしが、千太郎は或時乳母と共に店へ出て遊んで居るとき、猿曳が來たりてへい御目出たうと店へ猿を下せば、可愛らしき子猿が躍りながら千太郎の傍へ行くと、糊入へ包みて手に持ちたる上等の干菓子子を、これ遣らうぞと猿に投げ與へしを見て店の者共は、皆も大氣なお生れやと稱賛するに引かへ、萬助は顔色かへて奥へ立ちぬ。

我子千太郎が猿に干菓子子を投げ與へしを見て、萬助は急に奥の間へ來て、別家同様にして置く深川森下邊の伊勢屋仁助といふ小質屋の主人を呼び寄せ、皆貴公に少し御頼みの筋がある、と申して別の事でござらぬ、悴千太郎豊かなる中に育ちて錢儲けの苦しみを知らず、先程も店へ來た小猿に、まだ我等などは口へ入て味はふて見た事もない上菓子子を投げ與へたる所、傍の者は大氣の鷹揚のと申せど、我等の目から見れば是ほど冥利に外れたる事はなし、甘く育

ては幸き世渡りはならず、三子の魂百までと申せば、彼がちと錢金の有難味を知るやうに、貴公方で丁稚代に二三年使ふて下され、尤も我等悴と思ひ用捨せられては何の爲にもならねば、随分厳しく追廻し使はるべし、貴公方も當時さし當り召使も入らぬところ、強てお頼み申す譯なれば、月々食扶持として金二圓、外に小遣湯錢等に五十錢つづ送るべし、何分よきに頼むと有るに、仁助も驚き兎角の返答もなし兼ねて頭を掻くうち、萬助の女房お角は涙を押へかねて夫の方へ膝突掛け、何と思はれて左様急に無慈悲な事は仰有るぞ、少しばかりの菓子猿にやればとて、夫を奢りの冥利に外れるのと云ひたまふ事かは、殊に千太郎は脾弱き質、丁稚がはりに使はれては生命に障らうも知れませぬ、悪い事が有らば幾重にも詫びませう、手許を放す事はお免しあれと云へば、萬助は目に角立て貴様も最う今の身の上に馴れて昔しの上を忘れてか、其心得得る悴をば彼の様に育て上げたので有らう、よく聞けよ奢りといふに何處から何處までと區限はない、用ひ所によりては棒一輪を十圓で買うと、蜜柑十で百圓出さうと、強ちに奢りとは云はず、左れど我等が分際で華族方の若君が召上るほどの乾菓子、たとへ貰ひ物にもせよ平生口になづみ目になれて居ればこそ惜氣もなく猿に投げ與ふるなれ、夫も先がよい家の子供たちなら別義はないが、人參の尻尾を常食にする猿にやりしが奇怪なり、斯く奢りくせの付きし者、教訓を加へたりとて自ら苦しみて見

ねば直らぬものゆゑ、彼が行末の爲を思ふて仁助殿に頼む事ぞ、また脾弱ゆゑ丁稚奉公させたなら生命が堪るまいとは以ての外的心得違ひ、商人が家業の道を覺ゆる爲めに死んだなら、夫こそ武官の方々が戦場の討死と代らぬ譽れ、我家に召使ふ丁稚子者も其の母の目から見れば御身が千太郎をかばふと同じにて、いづれも手放して他人の中へ出してはいかなる憂目を見るで有らうと歎くは當然、されど其處を忍ぶが修行といふものなり、木馬で習はせればかりにては口強き生た馬に乗れず、痛はし悲しと思ふて家に置いては爲にならぬ、我も千太郎を可愛と思ふこといかで御身に劣るべきや、悪くはせまじ黙つて居よと窘めける。

仁助はやをら座を進め、千太郎殿に世渡りの險しさを學ばせんの思し立ち、流石は愛に溺れぬ御氣質は感服仕つります、去ながら鹽を踏ませる世間を見せるのと申すは、親の油汗で稼いだものを湯水と遣ひ散す放蕩者の上のこと、千太郎殿は行儀大人しく常からの御孝心、丁稚から塗り上げずと、木地の堅い御生れ付き、天晴此家督を曲みなく御受繼なされる事は私しが印形捺して御受合申します、母御様も仰有る通り天にも地にも掛替なき若旦那、ならはぬ下可業に御病氣でも出ては大變、畢竟貴君が此の御身代を斯やうに御丹誠になつたは御自分一代の事ではなく、御子孫の爲めに御苦勞もなされたのでござりませう、千太郎殿に凶事もあらば、是までの御骨折は皆な無益事と成りませう、と

理を盡して止むれど、萬助は頭を振ていつかな聞かず、貴公は其の心入れで渡世さるゝか、イヤサ妻子に樂をさせようとの動みばかりで家業に精出さるゝか、左りとは商人の本意を取失ひたる口上、近ごろ貴公に似合しからず、身代仕出すは妻子孫の爲めなりといはば、妻も子もなき獨身者は一生自分だけ食て通れば夫で商人の一分を盡したものの、家藏を持固めて跡へ残すは入らぬ土持でござらう歟、抑も商人と身をなしては、自分の榮耀子孫の爲めばかりに利を争ふにあらず、息有る間は一錢も多く儲け溜め、一尺も擴く間口をせんと勤むが商人の本分にして、一錢も無益に棄てず、一厘も入らぬ所に費やさぬが冥利を知るといふものなり、貴公は兼て聞知つても坐さん、我等夫婦は遠國より元手もなくて此の地へ來り、日傭稼ぎより少しづつ儲けたため、木挽町へ炭團屋を出し、夫婦ゆづくりとは鼻息もせず、夜はまた粉によごるゝ饅飽賣り、晝夜黒白に稼げども、鷺を烏と無理非道はせず、正直を看板に勉めたる甲斐あつて年々に儲け溜め、今は此の身になつたれど、まだ南の窓へ枕して長々と晝寝一度した事はござらぬ、樂をしたいは人の情なれど、それを堪へるは亦人の勤めなり、一人怠たれば家内中の怠たり奢りは尙ほうつるが早し、此まゝ千太郎の奢りくせを棄置けば、當人は勿論、後には我家に勤め居る者までの毒なれば、儲こそしほしの可愛さを棄て貴公にお頼み申すなれば、お角も末の涙を今溢ばして悴の後來を祝へかし、と直に

千太郎を呼んで木綿物の衣類に着替へさせ、仁助に連れ立ててやりたるは、皆も氣強き親御と誘ふれば、商人の心入れは誰も斯くこそ有りたけれと褒むるも有るは、人の心の取々なり。

第二

人こそ知らね内證の繰廻に沖の石かはく間もなき舷笠のなみだ雨に水嵩まさりて防がれぬ流れの質物

質といふもの誰が置き初めて流れの末を止めあへぬ恨をば世に残しけん、其の品々は馬琴翁の質屋の庫に盡したれば今さら利上げの小繕ひも未練に似たり、左れども此業には大いなる高下ありて、高きは外國の鑛山を質に取りて政府へ金を貸す西洋の大質屋、亦是華族の商法に丈夫を取得の安利貸、百圓以下は御斷わり申候といふ向もあれど、下りての下に至りては五錢三錢付く付かねを争ひて客と組打をするがの通ひかめいは伊勢屋、これで苗字が片岡ならとんだ四天王の口上茶番芝居の書割めいた云譯ばかりの板倉も、中は行き抜け品物は取つたか見たかに小僧が背負出して親質へ送れば、ホンの道縁の中宿に借直の夢をみるのやうな衣服、邯鄲が魂膽か一炊の代に眩ならずして入用の道具を曲げる職人あれば、瑞齒ぐむ老女が、片手は涙片手には鍋を携へて今ま孫めが驚風で死にました、嫁は旅へ移ぎに出て歸らず、嫁は内職の鼻緒を精出し過て指を服し左りの手は利かぬ惱み、さし當り線香も枕團子も買へぬ始末なれば、御無理ではござりませうが御慈悲にこれで十二錢

貸して下され、と手を合して拜ねばかり、主人は算盤の手を止めずして、其の鍋は何時も六百より貸されぬ代物、お前の孫が死んだとて五錢六錢貸し過しをして流されては此方が助からぬ、どう踏み直しても七錢よりは付きません、と跡はいくら口説も取合はねば、婆は涕汁を吸りながら、我がしめして居た木綿のクタ／＼帯を解いて鍋に添へ、漸やく十二錢借りて歸る、左りとは憐れな有様、實に氣が弱くて出来ぬものは丑の刻参りと小質屋の主人なり、萬助の悴千太郎は親の云付に是非なくも仁助の家へ來ての小僧代り、身の苦しさ辛さは厭はねど、毎日來る質置きたちの餘り氣の毒なのを見て涙たもち兼ね、仁助に向ひて誠に御面倒ではござりませうが乳母の所までやる手紙を一通お書きなされて下されと言へば、仁助は顔を打守り夫は定めて此家に居るが辛いゆゑ御家へ歸りたいとの文言でござらうが、爰をよく御合點なされませ、親旦那とて貴君を憎んで私方へ遣されたのではなく、全く修業の爲めなれば、辛いと思ふを堪へ玉ふが御孝行、私方にてもお痛はしくは存ずれど、親旦那が深きお頼みゆゑわざと他人の小僧並に使用ひ立てるを惡しくは思召さぬものと諭せば、千太郎はホロリと溢し、否々此家が辛いとの手紙にてはなし、先ほど多た婆さんのやうな質置達之餘り不便でござりますゆゑ、乳母より金を貰ふて彼の人たちの欲がるだけづつ遣たうござります、としやくり上るぞいちらしき。

ふは、本所邊に住ひし舊幕旗下の妹なりしが、仔細あつて屋敷を出で、此の仁助と夫婦になり始めは固き結び帶も崩せば馴るゝ世帯女房、今は親里の者も散り／＼に行方知れずなりたれば、此の家を大事と思ふ心一層強くなるにつれて、始末氣も深く、ひすこいは女の性分と云ひながらだん／＼客齒になるに習ひて、悴爲吉も母まじりの勤略者、父親仁助をさへ帳合の上ではやりこめるほどなるが、おたけは今千太郎が涙ながらに仁助に頼む事を傍聞して聲高く打笑ひ、此子とした事が飛だ我儘はツかり、遠が萬助様は一代に彼の身上とならるゝ程あつて御眼は水晶、此様な無理を云るゝを直さう爲めに此方へお預けなされたはよい御分別、コレ千太郎殿お聞なされ、お前は萬助様が御身代を仕出された後に生れ富貴にお育ちなされたゆゑ、世の世智辛い事を御存じ有るまいが、貧乏人といふものはいづれも憐れ氣の毒ならぬ者はなく、お前のやうに一々それに涙を溢しては海の水を逆さにあけても足りませぬぞ、五十錢といふは三十錢、一分といふを二十錢に踏み落し、隨分念を入れて付けてさへ流れた跡で調べて見ると、大きな損のゆくことは度々、情ない話を聞たに合力の心を加へて云ふまゝに貸して御覽なされ、忽ち身上は潰れて此方が身体に疵を纏はねばなりませぬ、お前は十二の年弱、此方の子の爲吉は十三なれど其の子簡は雲と泥、旦那殿もお聞なされ、此方の爲吉の發明さ、昨日も三圓だけ錢買ふて参りませうと云ふゆゑ、有る餘らぬ

店の金を持ち出して何にすると問へば、今ま角の湯屋で錢を兩替にやりたいが手間が掛る、一錢打で買ふ者はないかと頭を掻いて話して居たを聞きました、直を押したら三圓で四錢は打ちませう、家へ来る質置に纏まつた札を欲しいといふものもなければ四錢でも上儲けと直に驅け出して行つて、四錢打歩を取つて錢に換へて來たさへぬかりのないと思ふ間もなく、裏の車夫の内儀が來て、おむづかしながら此の紙幣を小さいのと換へて下さりませといふと、直に錢を渡して切實として一錢跳ねた手際、大人も及ばぬ繰り廻し、育ちも育ちながら商人に生れ付いた働きの者、慰みに質を取るやうに思つてござる千太郎殿とは大きな違ひ、お悦びなされ此方も私も年寄ツてから樂する身になりませう、誠に比べて見る物がなくては善い悪いは判然と分らぬ、千太郎殿の我儘を聞いて此方の爲吉の利發が知れたチト褒めてやつて下され、と鍍漿のはげた齒を刺出し涎をたらし、眼を細して餘念なげの我子自慢、母親の心は何處も斯したものと見たり、女房のお竹が我子の自慢するを聞いて仁助は赤面の汗を脊中へ流し、皆て／＼貧富の差別といふ者は是ほにも變る者か口惜しや、我とても橋の下に縮みて居たではなく、萬助殿とて大名高家の落胤でもなし、同じ身柄の同じ商人氏素姓にかはりはなけれど、只金の有ると無いで斯ほどの違ひ、忤も女房も爰へ出よ、賢こさうに身の恥を並べ立て千太郎殿を嘲けるは何事ぞや、悉皆鼻かけ猿が眞猿を笑ふと同じで、聞く

己が穴へも入りたい、千太郎殿が今ま云はれた詞普しの仁者賢君と等しい情の志ざし、成ほど人は氏より育ち、我等とても有餘る身代ならば千太郎殿の云る通り貧しい人に施してやりたい、人の憐れを見ぬ顔で一厘二厘の利を争ふは本意ではなけれども、左様してさへ緩やかに過ぎかねる世の中、涙を腹の中へ溢して因強も云ふぞかし、わづかの跳前を取るを手柄と心得、忤も誇れば其方までが後から扇ぎ立てるとは、左りとはさもない心入れ、其方も昔しは左ほいか、夫も是も貧なる我に連れ添ふゆゑと思へば一入無念なり、其方は忤の今の行ひを見て末が樂ちやと悦こばるれど、我は又末はいかにと案じらるゝなり、爲吉が此分にて成長せば相場事に掛つてはたくか、又は古着道具のてまたの商ひ正道には世を得渡るまい、左りといかた此様な者は東葉附木を掲げて人の門戸へ立つほどにも落ちぬもの、逆も大家の主人となりて召仕を數多養ふの器量にあらず、我等の運も知れたといふべし、夫に引かへ千太郎殿は富貴の中に育ちてひす事が目に染みず、持て生れた良心のまてに情深く人の難澁を見かねて金やうとの心入れ、さすが大家の子息なり、萬助殿の身代を受繼いで彼の倍にも儲け出し玉ふべき福相、總じて大きな身代をば持つ人は心大きく慈悲が第一なり、我等づれが及ばぬところ斯る仁心ある子息を我等方へ預け置き玉ふは黄金を泥中に埋めるも同じ、黒き色には染り易し、早く

白地で戻すに如じ、悲しいかな萬助どのも儲けの道には委しけれど、得ると喪ふとの累ひに追はれて人の踏むべき仁義の道にうとし、我等いかにも申し解きて御前を御家へ歸しませう、いざ御支度なされ、忤も女房も身は陋しと心はかまへて清く持てよ、慈悲といふもの心になければ、人は食を争ふ犬にも劣るぞ、と云ひ諭しつつ、身を起し、千太郎を連て八丁堀の萬助方へ出向き、千太郎殿の御志し天晴感服の至りなり、惡しきに馴れて移らぬうちお歸し申すと右の段段を述て同人を戻ける。

第三 三五の二十掛合はぬ算盤の玉の汗拭ふて取つた塵埃聖人顔の異見に秃た頭を右き左りへふるなの辯舌

富といふ貧といふ詞に左のみの違ひはなけれど、實際の上には富む者はます／＼利便を受け、貧しき者はいよ／＼不便を蒙ぶて、氣の毒の淵をいつまでも出かねるものなり、貧しき者は一日に手に握る金はわづかにして、生活の上には富む者より一倍の高き物を拂ふ、例之ば、富む人は米薪も安き相場を見て大問屋より一時に多く買ひ置けど、貧しきものは割新量炭を小賣より買ふうへ、拂ひの時の危ぶみあれば二割も三割も高く賣り付られ、味噌も醬油も品の悪きを高く買ふて此方から世辭をいふとは、皆々合はぬと歎かば、早く思覺して割のよい部類へ入るやうに心掛くべし、富貴の利便は是れのみならず、二階三階に四方を見晴し、品川の海も富

士の山も地代出さず、に我庭内の景色に算へ込み、ソレ彼の高いのが淺草の五重の塔、晴れた時には秩父の山々もよく見えますと、覗き機關の口上めきて饒應の中に加へれば、客も手を打ツて誠に眺望氣の樂になります、と品物にしての挨拶、夫には引かへ裏屋住ひの悲しさは、借りた丈の地代を出し、桃の木一本植ても隣の藏で陰となり、座敷に居ては青空も見られず、是ほどの邪魔をうけても迷惑と一言いはれぬは、金の威光に恐れての弱身か、子供の躰も誰教へねど自然と善惡の區別を爲すは争はれぬものなりと仁助は我身の上をはかなみ、千太郎の仁心を褒めて萬助方へ送り歸せば、萬助は鼻の上へ歟をよせて、はや半年ほど御世話に預かつたがまだ悴の不所存は直りませぬか、其の仁心だてが否さに貴公にお頼み申したるなり、御面倒では有るべけれど今しばらく御世話下され、其の情心が失せて儲ける一方に固まるやうに頼み入るとの詞に、仁助は額へ青筋を出し、コレ萬助様夫は御本心より仰有る詞か、いかに我々お蔭を受けて斯く渡世は致すとして餘り見くびりたる御一言、我等方へ千太郎殿を遣されたは、無慈悲無情を習はせの爲めか、イヤサ不義非道の教へ方には天晴相應の者と某を思召してか、左りとは情なき御了簡、其の御心入れの此方の子に、千太郎殿が生れたは驚が鷹と申すべし、掴かみさへすれば商人の本分は盡したものでござるか、總じて世の人のいとなみ千態萬狀にかはれども、強き金が欲しいばかりの目的ではなし、必竟金

が欲しいといふは人にも施し、我身もまた夫だけの樂しみを得んと思ふ故なり、其身も樂を享けず、人にも施こさず、握り詰めて死なれたら定めて閻魔王へよい土産ならん、嗚呼金は世界の寶ならで、罪と惡との塊り歟、と疊を叩いて諫めたり。

仁助の詞を聞いて萬助は呵々と打笑ひ、了簡の違つたとは我等より貴公の事なり、其の不覺悟より永年の間身上仕出しもせず、毎年同じ泣言を云ツて年を越さるゝと見えたり、貴公はむづかしき書物も讀まれ、いつも道理に中ることを云るゝに似合はず、渡世の覺悟に至りては甚だ疎かなり、然しそれも算盤を捨て學者の看板を掛けられての上ならば、金は入らぬと云れうと、袋へ錢を入れて門並施こして歩かうと云れなれど、唐棧の羽織に年中前掛をはなさぬ出立にて、其の了簡は大いに惡し、貴公は樂といふ字を只手足を伸ばして寝る事とばかり解し玉ふか、商人が息を切つて儲けの道に走るをただ樂が仕たい爲めの働らきと思ひなさるか、我等は幼少より商賣の事に屈托してむづかしい書物は覗きもせぬと、商人の本分は此處で有らうといふことは、多年世を渡ツて踏み知りました、儲ける上にも儲けんと日夜寝ます稼ぐのが商人にて、一足も退くなと進むのが兵士なり、爰等ではよいはと手をめめて、自分も樂をし人にも恵まんとすれば、其時がはや身代破滅の端緒なり、商業は死物にあらず、先へ出ねば跡へ下る、少しも油斷すべからず、假にも無常を觀すべから

ず、貴公は我を情けも知らぬ荒夷ただ金にかちり付いて一生を送る守錢奴と思はれやうが、我等はまた貴公等が情けの心があれど情の行ひなきを笑ふなり、慈悲や情は求めずとも、斯して稼ぐうちに有る、よく心して見玉へかし、身代豊なれば出入の商人職人にも僞を云はず、欺しを喰はせず、此方から書出しを催促して諸勘定を濟ませば、盆にも暮にもヤツサモツサした事なく、召仕の者もそれぞれに仕付け、町内一般の物入には貧しい人の分も背負ツテ立ち、是れまで人に一文半錢も損をかけたることなし、人は自分一人さへ過ぎかねて難澁する中に、九人十人を安樂に過すは大きな慈悲ではござらぬか、店角に立つ物貰ひにわづかづつの手の内を出し、又は名聞ばかりの宮寺の奉納物、それは善根とは云はれますまい、貧しく暮せば悪いとしりながら、偽りも構へ人を瞞らせ、身も苦しく、徒らに人の儲け話を聞いて咽喉を渴かせ、僻みの果は我身の不仕合の中へ人の幸ひを引き込みんとあせり、他所のよい話を聞けば胸惡がり、人の難儀に落ちるを聞いて悦ぶやうな魔界へ落ちますぞ、困る人に物を恵むといふ志しは至極よけれど、仕道が悪ければ善根とは云れず、他人の頭の蠅を追ふより我が家業を大事にかけ、傍觀をせず稼ぐのが廻り廻ツては誠の善根となるものなり、貴公も先慈悲心を取置で、儲け一方に精出されよとぞ諷ける。

諸も味氣なき事を承はる物かなと仁助は萬助の顔をつくづくと打眺めながら膝を進ませ、誠

や鹿を逐ふ獵師は山を見ず、只算算劫にのみ凝りて儲けにあがき玉ふより斯る間違ひたる理窟を彈き出してよく合ひたりと思すならんが、世は左る無情のものに非ず、御覽なされ天には清く月輝き、地には梅櫻の咲き満ちて人の心を慰さむるを、是も貴君の御目からは月は提灯が入らずとばかり、梅は實を取ることに櫻は花を鹽漬にするよりは見えますまい、木で彫つた像でも朽ちる事あり、況して人は鐵作りにはござりませぬぞ、百年無事に持つは稀なり、斯くはかなき世に立ちて、向ふ見ずに慾面引ばり、取ると遣るとは傍觀も觸らず、人は糞とも味噌とも云へ、金さへ溜めれば夫でよし、とは餘り狹すぎる御了簡、それでは金を使ふでなく金に使はれて生涯を送ると申すもの、云ふは憚り少なからねど、貴方のやうに片時も肩を休める間もなく、味よきを食はず、暖かに着ず、眼の光り帳面の外を寫さず、耳には店の者の寄算を聞くより外の樂しみはなく、齷齪として世を経たまふは富貴なれど貧賤に劣り、金は有りとも無きに如かず、必竟金といふものが無暗矢鱈と貴がらに、といふものは是を以て種々の樂しみ種々の物と換へらるゝ故にて、強ち是が家業の本尊にはあらず、力及ばずば是非なけれど、此ほどの御身代にて只召仕ふもの出入る者に御情あればとて夫で慈悲情を盡したりとは申されまじ、詰るところ情といふは人の心の誠を云ふものにて、志ざしきさへあれば貧しき女の一燈は長者が點せし萬燈より光明はるかに勝れたりとか、貧しきも

の心あるを笑ひ玉ふは僻事なり、最早御家も基礎固く、此上にとあせり玉はぬ方が却つて長久御繁昌の良策と存じます、是を持固めるは仁心に如かず、假令ば貴君は創業の君なれば武を以て烈しく働き玉ふが當然なれど、二代目は仁を以て懷けねば世は穩やかに参りません、幸ひ千太郎殿の持つて生れた御仁心、どの様にも御悦びなされて此上ます、其心の陋しくならぬやう立派に御仕立もなさるべきに、只商人は儲けねばならぬ、仁心は捨て金欲しがれと仰有るは、悉皆親孝行する者にチト不孝せよ餘りやさしくしたら親が付け上つて止所はなからうと水をさすと同こと、つら／＼世間商家の有様を見るに、施して身上を潰したといふ例を聞かず、有るが上にも積み上んとあせるよりして身代限りとなる者多し、此等の事をよく／＼考へ合せ玉へやと口を酔くして辯じたり。

云掛りになつては萬助も止められず、コレ仁助物議願置てくれ、成程世には結構な仁者多く人の難儀を見て共に悲しむ、餘所の頭痛を痛氣に病んでやらるゝは感服なり、そののみならず風流氣ありて月花の憐を知り、折に觸れては歌俳諧に想を述べ、香茶の湯に靜を愛されてはます／＼感服なり、而して後に身上を摺り破し、先其身が恵みたる貧者の仲間へ落ち入つて、どうぞお助け下されと一門一家知己他人に迷惑を掛け玉ふはいよ／＼以て感服なり、妻子を路頭に泣かせ、先祖の墓石まで取崩して賣り玉ふは仁の極め風雅の骨とも稱しつべし、いつも南

風に吹れて居るやうなダラリとした了簡には、往來で子供が泣くを聞いても憐を催し、持へ事の貧窮話しにも金を恵む、畢竟は自分の了簡に腕の續くだけ働らいてのけんといふ勇氣なく、食ふ物さへあれば齷齪するには及ばぬ、まづ緩くりと寝てこまそうといふ懶惰心より起るなり、小仁は大仁の賊とやら、彼の彼岸中に生るを放つといふ善根家が有るので雀は却つて鶉の災はひに遭ひ、なまなかの施しをされるより人を驅つて乞食に落す人は、自分で働らいて自分の始末をせよといふ手本を出す人世に少なく、生物識の瘦我慢、心に鬼を作りながら佛顔するこそ片腹痛けれ、また貴公は身上をよくせんとあせりて身代限りとなれる者多しと云るれど、是れ商人の身としては更に傷むべき事にあらず、勝敗は常の數なり、儲けんとして損をしたりとて恐るべからず、北海大廻しの船へ資本も我が命も積み込み、途中で難船して藻屑とならうと憾む處なし、損するが怖くして商賣がなるべきや、只商人の怖るべく慎しむべきは自然と身代の減る事なり、一時の買掛けで千圓損したりとて氣を落すに足られど、暮の總勘定に一圓喰込みしと見ば心を付くべし、是れ商人の秘訣なり、貴公と斯く論をするも無益各々思ひ込みあれば強ち我が云ふが理にもあるまじ、争ひは爰に止めて偕相談すべき事あり、朝夕會席の膳に向ひては八珍も足らずとするは人情にて、馴れては美食も旨からず、悴千太郎も富貴に育ちて富貴に暮しては又富貴の有難さを知るまじ、隨つて

世の味ひも噫知らず、空々寂々且那樣で仕舞ふは幸ひに似て幸ひならねば、一まづ他人の中へ投り込んで見んと思ふなりと打解けての話しに、仁助も感心し我等も御同意悻爲吉を修行させ申さんと互に約して別れけり。

二の巻

第一 臨終の遺言きゝ過た芥子息子

これはならぬと母親が手に汗握るは却て開き易き廊の初花

朝には紅顔に誇れども夕には白骨となつて消えぬと伏誼たゝいてチンと澄した和尚も、腹が痛むとて俄かに買ひ藥を煎じさせ、地震がすれば世直し萬歳樂、それでも揺りが止まねば跣足で庭へ駆け出して潰されぬ用心、極樂へ田地の買置して釋迦如來に請判頼んだやうな顔つきでさへ斯くの如くに命は惜しきに、まして況んや平生二天作に屈托して其心構へなきもの、卒去らばの際となれば狼狽周章半分は己が氣で死を早やめるものぞかし、光陰は走る箭の如く、また流るゝ水に似たり、八丁堀に根城を堅く構へ番頭手代持口々々を固め、鎌倉勢百萬騎群がり寄るにビクともせざりし千早金剛山の城廓も斯くやと思ふばかりなる伊勢屋万助、節季々々の拂ひ書出しは見事に勘定して滞ほることなかりしも、歳といふ借金追々に嵩み是を返済するの智謀は楠にも及ばず、枕を破つての勘略も其

甲斐なくして終に借の形に二つないものを取られて尊い所へ赴むかれぬ。臨終に悴千太郎を近く呼び、黄なる涙を流して呉々も質素儉約を守り、家業大事に怠るべからず、と遺言せられたる一期の別れ、親子の愛情千太郎骨身にこたへ、是より今までの鷹揚なる性質サラリと變り、親父万助に輪をかけた吝嗇となり、朝は疾から起きて自身臺所を見廻はり、釜の下に焚火が多い、コレコレ三や大根の葉が捨て居る、水をかけて干して置け、ソレソレ紙屑があるではないか、夫を芥と共に掃くことか紙屑籠へ入れよと、蚤取眼にて細かく氣を付け、年は二十一の男の花盛りなれど、着る物は親父のを直した野草天の怪物、さて變れば變るものと雇人一同、我を折りて成るだけ千太郎の睨みに合はぬやうと見る前だけの働きぶり、同じ引合せを二度三度して欠伸を堪へ、其うち旦那に嫁御を迎へたら、また元の大まかな氣になられやうと、夫を頼みに勤むれど、千太郎はなか／＼女などに目も觸れず、一人も口が殖えては年に積つて云々になります、迂濶に女房などは持てませんと番頭を算盤づくに談じつけ、飼猫の白も汚れ目が見えて悪いとて、鴉猫を飼ひ替へらるゝ始末なれば、母親も餘りの事とて異見すれば、父上の御遺言を何とお聞きなされた、此くらゐ厳しくしても年の行かぬ者と毎どつて何處かノラを乾く脱道があるもの、貴方も私に異見なさる手間で私の目の屈かぬ隅々の暗い所に氣を付け、勝手の手行燈の燈心でもお減しなされ、と反對の諭しに

母親も繼でいふべき詞なく、ホツと溜息つき奥の間へ看經に立れけり。

儲けるといふ事はあつても儉約といふ事を知らねば、策へ入れると水底抜けて何にもならず、年に千圓入金のある人が千百圓遣へば百圓の負債家なり、年に僅か二百圓儲ける者も百八十で活計を立てれば二十圓の餘りあり、富むといふ多く獲るにあらざして少なく遣ふにあり、此の心掛けなきものは金を貯へる事は皆で置き、戸棚の中に神功皇后を一夜の御宿もかなふまじと父の訓戒を守り過ぎて、千太郎は無暗と拳を握り詰め、取つたら放さぬ緋り嚴重、寐言にも帳合の合ふ合ぬの外は云はず、偶々親類の者が來ても薄い酒一杯出さず、鼻紙を火鉢で烘りながら此の氣候では麥作も當りませう、近ごろ大醫方の御説にも麥は米より身体の爲によいと申せば、店の者の養生の爲めに是から麥飯に仕づらうと存ずる、と麴面しての工面話し、いつまでも待つても膳を出す模様なければ、最うドンでもござらうかと客方より誘ひを掛ければ、イヤ日が伸びましたれば丁度お宅へお歸りなされて正午ぐらゐでござりませうと眞顔の挨拶、小面憎いほどの吝嗇は是ぞ先代万助殿が鷹揚を苦しんで折檻された祈り過ぎ、兎角人といふものは右へ偏るか左へ傾くかで中道には行かぬものと近所の人も我を折りたり、時も櫻の四月中旬、町内の地主中に散りて根にかへりし者ありて、葬式は午後三時、寺は橋場の總泉寺との觸れ出し、彼の川柳點の句に「七ツ半寺は山谷で親父

ゆき」といふ格にて、店の者を此の葬式に出すは石油をあびてから火掛りさせるより危ふし、と千太郎は自身で見送りに出で、棺桶の供に立ちて總泉寺へ着きしは午后五時過ぎ、讀經畢ツて親類の者がイザ御自由にお引取り下されと挨拶に出たは六時ごろにて、地主連中十一人揃ツて道をかへての歸りに山谷の重箱で腹を拵へようと言言したは熱湯好きの金兵衛、葬式の戻りに鰻はチト差合ひであらうとは俳諧氣違ひの隠居、何も死んだ宅兵衛さんが鰻になりはしまひしヌラクラして一生を過ごされたから、其縁でよし鰻にならうとも昨日死んだばかりだから未だ重箱の池へ漬けられるまでの間もなからうといつも演説を聞きに行く瀧澤何某が滔々たる辯解に、皆な尤もと同意して鮒儀ヘダヤと押し込むを、千太郎は無益しと心には呟きながら町内地主中の極めに、事があつても無ツても月に五十錢づつ積み置き斯る時には夫にて支拂ひするなれば、此處を避けたところが其入費が助かるでもなし、結句家へ戻ツてから夜食の膳に据るだけが損なれば、寧ろ明日の分までも詰め込んで餘りは折にして母の土産、と早くも胸算用して人々の跡に随ひぬ。

鐵腸は却つて溶け易く、固く握る拳は開くに早し、千太郎は勘定づくから考へて葬式の歸りに町内の者と共に山谷の鮒儀へ立ち寄りて飲みつけぬ酒に酔も早くチロ／＼とせしを見すまして、二ツ星に山形屋の若大將、今夜は是非廓へ付き合ひ玉へおいらんは酒の名に残りて出稼ぎ

娼妓と品は下ツたが、まだ吉原は何處か外より違つた所があるよ、君のやうな男振りで金があつて親がなしとは鬼に鐵棒、味淋に饅頭、甘いとも強敵とも滅法とも素敵ともつれた舌では云れない大極上々吉、箱は振ツても女には振られる氣遣ひのない御難、サア大將御神輿を上げ玉へ、兎も角も行くべし獅子と仕ようではないか、と越後屋角兵衛といふ平生は沈黙した男が酔つてはまだんやと跡を引き、鯨鯨立ちになつての燭りに、是は妙だ秀郷だ龍宮行きは面白いと堅氣が名代の新問屋の隠居までが浮れ出し、それは迷惑ひらさら御免と手を摺ツて詫びる千太郎は無理やりに引張り出して新吉原の何某樓へ連れ込み、銘々はたしなみの隠し藝、雇人の手前を兼ねて毎日閻魔顔はしてゐれど幾歳になつても忘れぬは此の道、地面持の旦那様が相好を崩して豊年ぢや／＼と菓子賣の眞似をすれば、唐物屋の主人は羽織を裏がへしに前から手を通して南京踊りと出掛け、いづれも命の縮みへ熨斗をかけたと明日疝氣に病むも忘れて飛び跳るに、千太郎はます／＼逆上せて泣顔になるを、茶屋の女は氣轉を利かせて相方の臥床へ伴へば、といよ／＼青くなつてどうぞ堪忍して歸して呉れ、とは左りとは近ごろ珍らしいウブな所作、大名の懷子とは此のお客、龜末にはなりませんよとの耳打ちに、相方娼妓は昔しの武士の具足金ともいふべき取ツて置ききの智慧を出し、ウブハウブのまゝに手を盡してのもてなし、千太郎は天鵲絨の額蒲團へ恐る／＼ににぢり上りて、脊中

に冷汗悉皆蟬蛸を塗盆に乗せたる如くなりし。偕一しきり小便所の方がや／＼と騒がしきと思ふうち、燒場の臭ひも鼻に入るやうになり、賑やかな所ほど静かなれば淋しきものにて、音頭をとつた角兵衛から先へ目を覺まして見れば昨夜の騒ぎは夢の如く、嗚呼くらぬ事をしたと腕を組めば、千太郎をば無理に連れ來りしは餘りに大人氣なしと心づき、少しも早く歸らんと急に人々を催し立てれば皆な後悔の顔色揃ひ、山形屋はどうしたまだ起きないかドレ起して來よう／＼と外から聲を掛けて座敷を明ければ、千太郎は蒲團の中へ潜り込んで越後屋さん私は少し腹が痛みますから貴君方はお先へお歸りなすツて下さい、との挨拶に頭を角兵衛が是れは是れは。

第二

吹き散らす暗雲つひに見ぬ旭影
さすがに目の覺めた自分意見
イデー軍陣羽織の名物裂

いづくは有れど一きは春めくは花の吉原なり、此地も二百四五十年前の前は葭蘆茂れる沼地なりしに、遊女町を移されてより忽ち極楽淨土の出店と變りて、年々の繁昌北に倚つて地中に磁石を埋めたわけか、鐵氣の有る者で吸ひ取られざるはなし。握り人と評判取りし千太郎が俄かに手を擴げての廓通ひ、番頭手代も始めのうちは少し風が變つてよい鹽梅と悦びしが、だん／＼遊びにしこり出してグワタ／＼バラ／＼と雷遣ひといふものに金錢を撒き散らすゆゑ、年嵩の

番頭は眉をひそめ、此の分には金剛石を袂に作つて土藏に積んで置くとも皆になるは間もなし、先旦那が爪に火を灯しての御丹誠を聞々と潰させては我等が申譯なし、と千太郎が二日酔に痛んで奥座敷に晝寝してゐるゝ所へ出て、だん／＼理を盡して諫むれば、千太郎は險重げに細く見開き、成ほど尤もなる意見一々承知したり、翌日から遊びを止むべしと云はば其方は悦ぶべきが、彼の君さまは何とせらるゝ、親の爲に身を苦界に沈めて便りとするは我等ばかり、若し一日も顔を見せず置たなら可愛や焦れて死なれるであらう、假にも一人の命金にかへられぬ重い事ぞと眞顔でいふに呆れ返り、斯う毒が廻はつては迎も我が兄先では癒らぬと見切りを付けて、番頭佐兵衛病氣と披露して身退けば、小松の内府がない後の平家の一門、平氣の類簞族ども、どうせ潰す身上なら少しあるうちに身の用心と鳴聲ばかりチウといふ溝鼠連中がさまざまに工夫して帳面をゴマかす、中にも二番々頭の八右衛門といふ横着者が金の手友へる時を見込んで此處は私しが働いて見ませうと我がシコタメで置た六百圓を人の名前で主人へ貸し付け、是は外の金と違つて今直とはならぬ處を私しの顔付で借り出した金子ゆゑ、餘所にどんな急な借財がござりませうとも夫は捨て置いて是だけはお拂ひ下さるべしと勝手な念を押すを、勘略の千太郎は脱殻のボン太郎と區役所へ届けも出さずに改名したところなれば、更に心付ず此急場を間に合せたは大きな手柄、是は

當座の褒美なりと煙草入を投げ出して與へらるほどなれば、内と外とで鑓をかけて身代を忽ち粉にはたき、いよ／＼分散間近となると死神の亡霊ともいふべき念入の山師共が引倒しの味方に付き、斯ういふ事を受負つて一度に三万圓儲けるの何處の山に金鑓があるから借區願ひを出して試み掘に掛らうの、彼の川の水を精製すれば石油になるの、風を袋へつめて風車場を立てようのと寄つて掛つて胴に上げ、サアモウいけぬはといふ段になると千太郎一人を抛り出して山師の形はかき消して失せにけり。

上り坂は汗もしとゞに骨を折れど、下りとなつては鼻鳴で飛んだ埒の開いたもの、親父万助が千載の末を期して動かぬ礎がたく築き立てし土藏住居とも可惜他人の物になして、千太郎は身一ツの外はチンカラリ、鍛冶町の裏店に引込んで古着屋のハタシとなり、喰はねば空腹といふことを今始めて知つて、嗚呼此の前大勢を連れて二日泊りの成田詣で僅か三日に百二十圓撤した事があつたが、彼だれも志學して殘して置たら差當りドンな小店でも持つて古着屋を始めようものを、惜しや欲しやと返らぬ愚痴を翻せしが、抑も遊びにはまつて身代を葉抹香とはたき立てる者に一錢にてもあるうちに目の醒める者はなし、融通のなるだけは八方へ手を廻はして二重にも三重にも品物を書き入れ、イザとなるとドカ落ちに落ちて湯銭にさへ事を欠く身になりはつるものなり、まだしも千太郎は少しの間賃物を自から取扱ひて、木綿物と絹物だけの

區別がつくところから、車夫にも落ちずして毎日柳原の堤や市場をぶら付いて彼方此方へやり返すうちに、十錢か二十錢儲けて漸く其日を送れば、白かりし面も埃に黒み、ろく／＼には湯にも入らねば何となく物臭く、愛敬ありし口元は鎗頭と細くなり、智恵と油氣はぬけて溜るは垢と家賃ばかり、金にはなれては人間も淋しいものと秋ならねども身に染みる風にまた／＼隣の燈火壁の破れより折々さすに、睡られぬまま枕元の煙草入をさぐり、マツチを摺つて一服せんと起直りて匍匐になり、ア、思ひ出せば去年の今ごろ、オ、丁度今夜だ、茶屋で一騒ぎした跡で總勢残らず繰り込んだところ、目ざす御敵は手疵にて病院入りとの事に興を醒して歸らうとするを、彼の花衣のおさとめが引とめて偶には冷たい夜具へも寝て御覽なさいといつたのが氣に入つて、夫から大きな悶着が起つて立つた立ぬの、死ぬの生きるのと成つたので己も大きに痛手を負つたが、兎も角も彼女は才女だ憎くないよと獨言、千さんお客様かへ大分面白いお話しが聞えますネと隣の女房に聲を掛けられて吃驚し、ナニ一人で假聲を遣つてゐるのさ大分御精が出ますネ今に弗箱の置き場に困りませうハ、と世辞に紛らしてつくづく思ふに、隣りの下駄職は斯くの如く毎夜々々十二時過ぎまでも稼ぎて翌朝も我が起る頃には朝飯を仕舞ひて夫婦の共稼ぎ、己は夫には引かへ親父が積み上げた身上を崩して此の身になつてもまだ目が醒めきらず、夢にも現にも罰當りの妄想、こ

れぞ誠に商人冥利に盡きたる境界、嗚呼勿体なし勿体なしでや命と根を資本にして今一たび昔しの風を吹き返さんと思ひ起せしは、まだ福神の控へ綱、どこにか果報が残りしと見えたり。振り出しは東京の眞中の日本橋、斜めに富士を睨みて立つとき、若し右の足へ力を入れて其の方へ踏み出せば東北の方松前函館へ向ひて進まん、若し左の方へ向きかへて進めば大坂長崎西南の端に至るべし、踏み出す始めは一步の違ひも末は千里と距離るは人の身の上もまた同じにて、サア何せうぞといふ時の覺悟次第、向き方一つで其の善悪は定まるぞかし、落ぶれ果て寄る邊なく今は何とか千太郎も誰異見するとなく先非後悔の心きざせし折から、隣り長屋の下駄職夫婦の稼ぎに勵まされて大きに發明し、此上は身を粉にはたらいても今一たび昔しの身上にならん、我はまだ二十六なり、父上の東京へ出て稼ぎ出し玉ひしは三十越してと聞くものを、今氣の付くは遅きに非ずとグタリとしたる氣を取り直して勇氣身体中へ充ち、いつも隣りに叩かれて不精々々に起る者が一番鶏と共に飛び起き、井戸端へ出て空を仰ぎ、嗚呼生れて是まで朝寝ばかりしたての夜の明際の此の景色を今朝始めて見たが誠に心持のものだ、先づ早起きの徳で二十六年來知らない空の景色を知つた、是だけが今朝の儲け物、何だか豪氣と勇ましい此の勢ひで出掛けようと思ひ集めた一圓ばかりと白金巾の風呂敷一つ肩にして市場を廻りしが、我が心持勇まなければ世間万物が皆な活々とし

て面白く、或る人の許にて裏を剝せし陣羽織の崩しが丸めてあるを何だか物を云ひさうな古裂と目を付けて引き出せば、千さん夫は下駄新道の袋物屋が今朝來るから取つて置いてくれと云つたのだからと斷るを、商人がそんなまだるい事を云つてゐられるものか、八十錢といふ所を五錢買ひ上げれば文句はあるまいとやり込めて錢を渡し、露店物の袋物師でも目を付ける處を見れば何でも少しは物にならうと、以前遊び友達で是も同じく今は大きに間口を狭めた大手屋といふ家へ行き、或る所からは名物製だと親父が大切にしているが急に困る事があるゆゑ買つて呉れと頼まれて二圓八十錢出したがどうだ掘り出しとは行かぬかと見れば、大手屋は裏表を打ち返し成ほど何廣東とか云ひさうな工合だ、私の所で潰すより捻り屋へ向けたら坪幾許と來て六七圓にはなるだらう、オツト成るだらうでは困る、金が急がしい、四圓で負けて置く跡は君の儲け次第と手を打つて四圓受取り、甘いぞ／＼仕合せの風が此方へ向いて來た、此圖を外さず近在の市へ出て見んと其日のうちにまた市場へ取つて返して田舎向きのポロ類を仕入れ、大風呂敷へ包み込んで肩の痛むを物ともせず、爰が辛抱と獨り者の心安さは誰に云ひ置く事もなく、出先より直に松戸の市へ赴きぬ。月六齋とか又は一日とか十日市とか定まりて近在の賑ひ上沙に流れ寄つたかと思ふ足駄の片足もはいて行ける商ひ物、土瓶の蓋ばかり並べても湯茶を吸りて過ぐすは猶も廣い世の中、

實に營業は草の種と松戸の市へ始めて出て千太郎は感心し、是なら己のポロ店も驚くことはいと明地を見立て、風呂敷を擴げんとするとオイ其處は私の番だ何處の組の人だか無暗に店を出ては困るぜと何でも二錢八厘店の男に叱られてキョロ／＼し、また四五軒行きて荒物屋の前へ立止ると、其處へ出されては店の邪魔だ何方へ行つて下さいと追ひ立てられ、是れは困つたと頭を掻きながら立ち去らうとするとき、荒物屋の主人が奥から出て、モシ／＼お待ちなさい若旦那ではございせんか千太郎様ではと云はれて吃驚振り返れば、諫を拒んで暇を出した番頭の佐兵衛なればハツと驚き、面目なさと思ひ懷しさで退きもせず進みもやらず重い包を背負つた儘、咽喉佛に苦しみをさせてボンヤリと佇むを、先づ／＼此方へと呼び入れて佐兵衛は涙を流し、申して返らぬ事なれど今ま此の形をなさる事が二年前に知れたなら折角のお住居を手には渡すまいもの、諸々残念至極まだしも貴方のお目が覺めて稼いで喰うのお心が付たのは御運の尽ぬところ、ナニ市廻りの古手物能うござります、元が薄いと仰有るが其の御奮發が即ち資本、お心さへ弛まねば天晴れ身代を仕出し玉ふべき御器量とは御幼少の折から御見上げ申しました、私しもお家を出ましてから此家の入夫となり、一生懸命に稼ぎましたお蔭で店の品物も殖し、借家であつた此家も昨年の暮に買ひ取りまして今は少しは人らしく成りました、貴君が其心になれば及ばずながら昔しの御恩返